

君棲む数 もくじ

言葉の寺に生きて、そして

中島信子 3

日めくり詩集

桜井信夫 91

エピソードにかえて

中島信子 221

装丁 富高京二

言葉の寺に生きて、
そして

中島信子

桜井信夫の若き時代は、愛する家族との永別の連続でした。
 六歳で二歳下の妹を疫病で亡くし、その後、太平洋戦争で広島県呉市から学徒兵として乗船した長兄を、そして軍需工場勤務の父をも亡くしました。

訣別

たたかいの自棄な激情に
 毎日を浸し 疲れた人々の
 ぶつかり合う意志をのせた電車。
 五月の太陽のさざめく光と麦の緑に
 束の間、この世を忘れた私達を
 ともどもにのせ合った電車を。

※ 太平洋戦争（たいへいようせんそう）：1941～45年。日本が米国ハワイの真珠湾を攻撃して始まった戦争。初めは日本軍が優勢だったが戦局は一変。次々と敗北し、広島、長崎に原爆を投下され、1945年8月15日、昭和天皇はラジオで全国民に向け敗戦を伝えた。

農村から都会へ、
光と緑から、むらがる鉄灰色へ、
ひとりひとりから、驀進する集団人間へと、
ひたすら走る電車のなかに、私達はいた。

技師のあなたは火薬製造のため、
少年のわたしは学徒動員のため、
あなたはそのまま、西の京都へと
堅くとじた 旅行鞆をさげ
わたしは途中の駅で
死に物狂いの人混みを泳いで降り、
交わす言葉もなく、心には
緑の輝きと灰色の広がりをいだいて、
別れたのであった。
あなたは再び帰ることなく、

病身を耐えおして骨肉をけずり、
（あの時のあなたの顔の肌は
何と土色だったことだろう！
あの時のあなたの眼は
何を考えておられたのだろう！）
葉の散り、木々の枯れたつとき、
もはや 相い見ることなく、
もはや 語り合うこともなく、
幼き日の想い出のみをわたしにのこして
あなたは逝かれてしまった……。

一九五二年十一月十一日

桜井が二十一歳で『訣別』を綴ったころ、私はまだ幼児期で自我に目覚めていませ
んでした。しかし、両親が姉と弟の中間にいる私を、疎ましく思っていることは感じ
とっていました。勉強嫌いで川や田で遊ぶだけの私を、とくに母はわが子として受け

※ 軍需工場（ぐんじゅこうじょう）：軍隊直属の工場。武器、弾薬などの軍需品を開発、設計、製造、修理、貯蔵、支給する施設。軍需工廠（こうしょう）、造兵廠とも呼ばれる。

※ 学徒動員（がくとどういん）：深刻な労働力不足を補うため、中等学校以上の生徒や学生が軍需産業や食料生産に駆り出されること。＝学徒動員（がくとぎんろうどういん）。

入れられなくなっていたようです。桜井の哀しみとは異質でしたが、私もまた両親の温かみを掴めないまま青春時代を送っていました。

成人式も祝ってもらえず、出版社勤務の過労から体調を崩し、自宅療養中は母の言葉の暴力に苦しみ、人生に絶望的になっていました。

二十一歳の誕生日が目前の日でした。冷えきった心と春の雪に、生きていくのが辛くなり、いつかはいつてみたいと思っていた北海道の知床で永遠の旅に出ようと思いましたが、早朝自室で遺書をしたため机の上に置き、そっと家を出ました。私の行動を気にも止めない母が、遺書を読むのは翌日と思いつながら、上野駅から東北本線の列車のシートに身を沈めました。

遺書に書いた両親への言葉を反芻しながら、車窓にかかる雪を見つめ、ふと姉に贈呈された『ジェーン・エア』のロチェスターにめぐり会っていないと強く思ったのです。父の愛も薄かったためか、私には少女時代から年長の男性への思慕がありました。ジェーン・エアの生い立ちと私の生い立ちも重なる気がして、私を無条件に愛してくれるロチェスターのような男性に出会うことをいつの間にか願っていました。

——きつという。私のロチェスターに出会わなければ。

その内なる声に途中下車をして、生きていく道を選びました。そんな私の前に、ロチェスターとなつて現れたのが桜井でした。

桜井は偉丈夫で、俳優の三國連太郎（一九二二—二〇一三年）によく似た風貌が印象的でした。ある講演会の司会者として、壇上に立つ桜井を何の脈絡もなく、

——この人の奥さんは幸せだろうな……。

そう思いながら見たのが最初の出会いでした。その後、仕事の関係で度々会うようになりましたが、私は桜井を既婚者と決めつけていました。桜井は私に好意を寄せてくれましたが、私は避けつづけ、父の上司の甥と婚約をしました。女は二十一、三歳で結婚するものと思いついていた母が介在し結婚を決めたのです。

桜井が未婚であることを知ったのは出会いから三年後、婚約者との結婚式二カ月前でした。婚約者にまったく愛を感じられずにいた私は、父を必死に説得し婚約を破棄すると桜井の胸に飛び込みました。

桜井は兄とも親友とも慕っていた人を自死で失い、

——もう独りでは生きていけない。

と、深い哀しみのなかにいるときでした。信夫と信子という名。私の誕生日の三月

※ 『ジェーン・エア』（原題：Jane Eyre）：シャーロット・ブロンテの長編小説。1847年刊。孤児ジェーンが家庭教師として住み込んだ家の主人は貴族のロチェスター。身分を超えた恋愛が描かれている。

二十五日を選ぶように自死した桜井の親友。その縁も不思議でした。しかしなにより、桜井の私の手を包み込む手の柔らかさ温かさに、焦がれてきた愛情あふれる父性と母性を感じ、

——この人と生きていこう。なにがあってもついていこう。

と、思いました。一九七二年の沖縄返還[※]の一週間後に桜井の妻になりました。死の哀しみと戦争の不条理さを強く感じていた桜井は、新婚旅行先に沖縄を選びました。白い光のまぶしいなか、私たちは沖縄の地に初めて立ちました。沖縄は爆音と鉄条網の中に暮らしがあり、それは結婚の喜びを打ち砕くほどの衝撃でした。

2

娘の歌織が誕生すると、幸せを実感できるようになった桜井は度々、

「僕に妻がいて、こどもがいるなんて夢のようだよ」

と、呟きました。詩人は経済的にはとても不安定でしたが、二人で歩けばどうにかなるものです。結婚四年目には、神奈川県藤沢市の湘南台駅前マンションの一室を購入できました。

九階のわが家からは東に鎌倉連山から南西に江ノ島、大島、天城山が望め、北には少し身を乗り出せば富士山が裾野まで見えました。海山の幸にも恵まれ、鎌倉や伊豆へと度々車を走らせました。

私も児童文学の世界で生き始め、藤沢での生活も落ち着いてきた春の日でした。

出生時には検査をしなかった歌織の血液型を確認するために、小児科を訪ねました。結果は歌織も桜井と私と同じB型でした。それを桜井に告げる際に、悪戯心から、「それがね。歌織の血液型はA型だったの」

と、言ってみたのです。もちろん桜井は二人ともB型ということは承知しているので、A型の子が生まれるはずはありません。窓辺のテーブルで新聞を読みながら、桜井は私の報告を聞きました。結婚六年目ともなれば、桜井の性格を概ね把握しています。彼は激高などすることはないとしても、驚きはするだろうとの思いでした。

桜井は新聞に目を置いたまま、

「ああ、そう」

と、だけ言いました。まったく動揺したようすもなく、あまりにも素っ気ない返事に、私の方が狼狽して、

※ 沖縄返還（おきなわへんかん）：敗戦後、米国の占領下にあった沖縄県。1971年、日米間で沖縄返還協定が調印され、翌72年、祖国日本に復帰した。しかし、米軍基地、専用施設は残り、在日米軍施設の面積の約74%が沖縄県に集中している。

「ねえ、A型って言ったのよ。あれっ、それはないよ。ぐらい思わないの？」と、少し強い口調で問い返しました。桜井はやっと新聞から目を離し、私の目を見ながら、

「思わないよ。信子の生んだ子はどんな血液型でも僕の子だから」と言い、穏やかに微笑みました。その桜井の顔を、私は泣き出したい想いで見つめました。そして、B型と書かれた検査結果のメモ用紙をテーブルに置き、歌織の降園バスを迎えに玄関を出ました。

エレベーターに乗ると、一気に涙が溢れました。両親に疎まれたつづけた二十数年の歳月が空中に拡散し、代わりに愛されることの温かさや豊かさが体を包み込みました。歌織が玉川学園に入学し、新しい日々が始まりました。桜井も私もそれぞれが執筆に忙しくなっていました。桜井は『げんばくとハマユウの花』（ほるぶ出版）、『デイゴの花』（国土社）と、戦争に関わる作品をつづけて上梓し、同時に詩作に想いをめぐらせていました。

こどもを得た幸福の反動が、父や兄を奪い自身も体験した戦争への怒りとなって桜井を突き動かしたのがこのころでした。桜井のその熱い想いを、『げんばくと

ハマユウの花』を読み受けとめたのが、沖縄の女子学生の湧川（結婚後、知念）紀子さんでした。湧川さんは桜井に「ぜひ波照間島のマラリア戦をこどもも読める物語にしてください」と、マラリア戦の悲劇を書いた『もうひとつの沖縄戦—マラリア地獄の波照間島』（ひるぎ社）を送ってきました。桜井はこの悲劇を知って強い衝撃を受け、胸の内深くに波照間島の哀しみをおくようになりました。

一九四五年に沖縄戦が激しさを増すころ、軍の前線基地にするために沖縄の離島の多くが強制疎開を軍部に命じられた。波照間島もそのなかの一つだった。

日本最西端のソテツが自生する美しいこの島の全島民が、山下虎雄と名乗る離島残置業者の青年将校一人の軍刀に脅されて、西表島へ疎開させられた。そして、島民たちはたちまちマラリアを媒介する羽斑蚊の餌食となり、一五〇〇人の三分の一が命を落とした。

桜井はマラリア戦の悲劇を調査すればするほど、星になってしまった波照間島のこどもたちと歌織への愛おしさが重なり、『マラリア戦』執筆へと心が傾いていきました。

※ マラリア：マラリア原虫（寄生虫の一種）の感染による熱病で、蚊（ハマダラカ）などが原虫を媒介する。症状は高熱や頭痛、吐き気など、悪性の場合は意識障害や腎不全などを起こし死に至る。亜熱帯・熱帯地域を中心とした感染症の一つ。

※ 強制疎開：敵襲、火災などによる損害を少なくするため、集中している人や物を強制的に分散、移動させる政策や行い。「疎開」は、第二次世界大戦後は東日本大震災などでも使われた。

※ 離島残置業者：太平洋戦争時、現地住民を組織しゲリラ戦を指揮するために配属された陸軍中野学校出身の工作員のことで、波照間島ほか、伊平屋島、伊是名島、粟国島、久米島、多良間島、黒島、西表島、与那国島の9島に配置された。

※ 羽斑蚊：科カマダラカ亜科（学名：Anopheles）に属する昆虫の総称。世界に約460種、うち約100種がヒトにマラリアを媒介できる。

しかし、そのための取材時間は糧かぜとなる仕事に大きく影響えいきやうしてきます。取材費もかかりません。桜井は、できたら叙事詩じじしの形かたちでと思っていたのですが、詩集は簡単に商業出版にはのれません。自費出版となればその費用も必要です。日々の生活に追われながら、出版にかかる費用を計算する日々になりました。

「おとうさん、波照間島はてるまじま、今なら書いて大丈夫だいじょうぶよ」

桜井にそう言えたのは、なんと歌織が大学を卒業する年でした。湧川さんの手紙と『マリアリア戦』の資料を机上に置いたまま、十五年の歲月さいげつが流れていました。

還暦かんれきを過ぎた桜井の手には、皺しわが目立っていました。

「ありがとう、なるべく費用がかからないように頑張がんばってみるよ。お父さんや孝夫兄さん、小さくして死んだ節ちゃんのためにも、そして、なにより大人の理不尽りふじんで起こした戦争で死んでいったこともたちのためにね。詩しなら悲惨ひさんさが生々しくならずにごどもたちも読めると思うし」

とおいむかしの むかし

南の海の 小さな離れ島はなに

天地のめぐみゆたかに

わずらいごと あらそいごとなく

島の人びとがくらししていた

ところが あるとき

どこまでも青い空がうしなわれた

どこからともなく黒い雲くもがわきあがり

暗くよどむ黒雲くろくもが島をつつみこんだ

『ハテルマシキナ』（序章 よみがえりの島）より抜粋

執筆に二年をかけ、長編少年叙事詩『ハテルマシキナ』が誕生しました。出版は埼玉さいま県越谷市こしがやの「かど創房そうぼう」からでした。奥付おくづけは一九九八年八月十五日です。

タイトルの『シキナ』とは、波照間小学校校長・識名信升先生の名前からとりました。識名校長は、強制疎開そかいした西表島の浜辺で青空教室を開きます。ところが開校したその日に、山下虎雄が軍刀を振りかざして閉鎖へいさしてしまいました。波照間島のごどもたちの悲劇の発端でした。

※ 糧：ここでは生活費を意味する。一般に食糧、食物。または精神的活力の源泉。

※ 叙事詩：歴史的事件や英雄のことを、ありのままに述べ記し、韻律を整えた文体。広くは散文ではなく、詩の形式の表現を用いる。

桜井が波照間島を訪ねたのは、出版元が確定し浄書に入る前でした。

「今の段階で訪ねたことが本当によかったと思うよ。想像で膨らませた世界がそのままにあったからね。僕が描いた世界に自信がついたし、波照間の人々に会って、深い縁を感じたし」

日焼けして帰宅した顔は、満足と高揚感に満ちていました。

浄書された原稿を読み『マラリア戦』が震えるほどの、哀しい出来事だったことを私は知りました。本島での沖繩戦が炎の戦いだったとすれば、波照間島ではマラリアとの戦いでした。桜井の静かな言葉の連なりで描かれた世界は悲惨でしたが、こどもがよく理解でき、感動させる魂を持っていました。

日本人の多くは、沖繩戦さえよく理解していません。まして、波照間で起きた悲劇はほとんど知られていません。その事実をどのように伝えるべきかを考えて、出版と同時に藤沢市での記者会見を企画しました。

一九九八年八月十一日、上梓されたばかりの温もりさえ感じる『ハテルマ シキナ』を携えての記者会見でした。挿絵画家の津田櫓冬さん、「かど創房」主宰の門馬正毅さんも駆けつけました。発行を終戦記念日にしたことで主要各紙が記事にし、多くの

人の中に『ハテルマ シキナ』は入り込んでいきました。

一方、門馬さんの力入れで、何カ所かで全編を朗読する会が開かれ、それがまた新聞記事になり、テレビの取材も受けました。しかも、少年時代にマラリア戦を経験した宮城栄吉さんが、桜井のペン先から生まれた少年を、

「本に登場する少年は私です。マラリアで亡くなった両親のためにも、あの苦しみを書いてくれてありがとうございます」

と、三線を抱え、越谷市民会館（埼玉県）での朗読会に、桜井を尋ねてきたのです。

「僕の心の中の少年が現実として存在し、こうして会えるとは思いませんでした」と、桜井は宮城さんの肩を抱き、目を潤ませました。

上梓から二年後、門馬さんの深い想いが軸になり、越谷市の有志からなる朗読会が組織されました。毎年、沖繩戦終結の六月二十三日前後に、多くのこどもたちも参加しての朗読会が持たれるようになりました。

私が桜井と波照間島を訪ねたのは、出版から五年後でした。

島は美しく悲劇の片鱗もうかがえませんでした。桜井の案内で島内を歩きながら

『ハテルマ シキナ』の一節を思い出していました。

※ 沖繩戦：太平洋戦争末期、米国中心の連合軍との激しい地上戦の戦場となり、20万人を越す犠牲者のうち一般住民の死者は9万4千人にのぼった、日米の最大規模で最後の戦闘。主に沖繩本島で行われ、組織的戦闘は1945年3月26日に始まり6月23日に終了。

ある家の母親は 高熱のあと起きあがり
幼いわが子の頭に水をかけ
ああ すこしでもらくにしてやりたい
ああ なにかできることを と
家じゅうさがして カミソリを見つけ
幼いわが子をうつぶせにし
かわいらしかったその背中に
いくすじものカミソリの刃を走らせた
どす黒い血がふきだし
悪血をとりのぞく瀉血しゃけつの療法が
マラリアの高熱をさげるかどうか
マラリアのくるしみをのぞくかどうか
母親は悪血をぬぐいとった

3

波照間島はてるまじまがより私の心の奥深く入りこんだこの年、わが家に劇的な変化が訪れまし
た。一九九九年十一月に岩手県出身の青年佐々木誠くんと結婚した歌織に、こどもを
授かったのです。結婚四年目の喜びでした。が、なぜか桜井も私も孫の誕生という事
態を、考えたことはありませんでした。それぞれが仕事に追われながら、二人の静か
な生活を楽しんでいたからかもしれません。

歌織は大学卒業前には一人暮らしを始め、編集者として結婚後も頑張っていました
し、こどもが欲しいとの言葉を聞いたこともありませんでした。まさに青天の霹靂で
した。

「おとうさん、歌織はママになって絵本を作ってみたって思っているようよ」
「それはいいけれど、こどもは誰が面倒をみるのだろう」

桜井も私も周りには、保育園に通わせながら子育てをした知り合いはいません。そ
のため、保育園での子育ての認識が欠落していました。私は焦りました。こどもは母
親の手で育てるのが最良、との思いに縛られていたからです。孫に寂しい思いをさせ

※ 瀉血：人体の血液を外部に排出させることで症状の改善を求める治療法の一つ。
中世から近代にかけ欧米で行われたが、現代では科学的根拠がないとみなされた。現
在は限定的な症状の治療に用いられるのみである。

てはいけないとの心配が肩にのしかかってきました。

「歌織たちの近くに一部屋借りようかしら。あのマンションは手狭で私が住み込むのも無理だし」

桜井は、

「借りるのも一つの家だけれど、生活費は二重の負担になるよ。それに信子の仕事はどうするの。体力が持たなくなるよ」

との考えでした。そして悩みに悩んで出した結論が同居でした。

湘南台に住んで二十八年。マンションの住民同士の交流がスムーズで、生活には便利そのものの立地です。しかし、厚木基地の間断ない爆音が年々ひどくなり、相鉄線と横浜市営地下鉄の乗り入れで駅前特有の騒音も増えました。もともと音に敏感な私は、転居さえ考えたときもあり、そんな気持ちも加わっての結論でした。

「保育園に通わせて、それでも無理なときは人に頼むかママにきてもらおうと思っていたけれど、同居してもらえれば助かると思うわ」

同居の意向を歌織に伝えると即答で賛成しました。

決断すれば動き出すのが早い私です。桜井はつねに私の行動力に全幅の信頼を寄せ

てきました。湘南台のマンション購入時もそうでしたから、このときも、

「信子のしたいようにしたらいいよ。僕は信子が納得すればそれでいいから」

と、言いました。私はまず銀行に向きました。住宅ローンの関係で不動産の情報があるからです。

歌織たちの勤め先が新宿経由なので、小田急線沿線で五人がそれぞれの部屋を確保できる一戸建てが希望でした。歌織たちの住む世田谷区で考えてみましたが、手が出る価格ではなく、結果、狛江市の基礎工事中の建て売り物件にしました。

駅から徒歩十分の4LDKで、日照が多少悪いのですが、間取りが希望通りでした。最終的にはみんなで見学して決めました。

孫の誕生は十月一日、家の完成は十月二十日予定です。湘南台のマンションを売って頭金にし、残額は若い二人がローンを組みました。

湘南台を離れる日が近づいてくると、寂しさが増してきました。住み慣れた土地への愛着と、増えた蔵書のために大がかりな改装を二年前にしたばかりだったことも切なさを増しました。マンションと戸建てでは、家具のサイズも合いません。家具はほとんど、蔵書さえも半分は処分をしなければなりませんでした。

※ 厚木基地：日米共同使用の基地。神奈川県綾瀬市と大和市に跨り、面積 5,068,806 m²、東京ドーム約 108 個分。戦前は帝都防衛の主要基地だった。戦後、ダグラス・マッカーサー元帥が降り立ち、日本占領政策はここから始まる。米軍の主要航空基地としても現在に至る。

※ 狛江市：東京都の多摩地域東部にある、人口約 8 万人、世帯数約 4 万。「水と緑の住宅都市」をキャッチフレーズとする。犯罪発生率は全国全域で最下位。

「ケンもいて、歌織が学園から帰ってくるのを、おとうさんの部屋の窓から見ていて、楽しいことがいっぱいあったね」

歌織が小学一年のお年玉で買った、雑種の中型犬と暮らしたのは十七年間でした。桜井の百冊を数える著作も、ここから生まれました。私はキッチンの前に作った、畳のスペースで物語を書いてきました。そこにあるのが当たり前の本や家具ともさようならです。

転居は十月二十三日に決まりました。歌織たちは私たちが少し落ち着いて、十一月になってからとしました。

その前に、新しい生命に出会える二〇〇三年の十月一日がきました。

世田谷の成育病院に駆けつけて待っていると、

「生まれました。やっぱり女の子でした」

と、出産に立ち会った誠くんが走り寄ってきました。私は歌織を命がけの難産で産みましたが、桜井と私の祈りが通じたのか歌織は安産でした。

孫との対面は、子との対面とは違う柔らかな喜びでした。桜井はより寡黙になり、歌織に「おめでとう」も言えずに小さな生命を見つめていました。

「かれんという名前にするの」

誕生する前から歌織が考えていた名前でした。英語圏でも通じそうです。私も桜井も反対する理由はありませんでした。

この日から、すべてがかれんを中心に回り始めました。誠くんのお母さんにとってもかれんは初孫です。誕生の日に岩手から上京し、歌織の産後を助けてくれました。

「ほお、狛江はもう秋なんだね」

荷物より先に私たちが着き、桜井が玄関前の娑羅の木を見上げ眩きました。狛江の地での桜井の第一声です。娑羅の葉が数枚紅く色づいていました。私は植物が好きでしたから、泣きながらマンションを後にしてきた直後だったので、小さな庭でも慰められました。

木の香のする家に桜井と二人でいると、喪失感がほんの少し小さくなり希望が湧いてきました。二階の右奥が桜井の部屋です。

「まいったなあ、アメリカ映画の『裏窓』のようだよ」

四方がそれぞれ隣接する家に囲まれて、窓から外を眺めるのが好きだった桜井は

少々落胆らくたん気味きみでした。それでも、マンションの本棚ほんだながピタリと収まったのでほっとしたようです。私の部屋は一階の玄関隣とびなりです。南の窓から手を伸ばせば娑羅しやらの木に触ふられます。桜井とは反対に樹木がそばにある幸せを感じました。

翌日から午前中は、歌織の家に寄ってかれんの沐浴もくよくを手伝い、午後は新居の片づけです。桜井と二人だけで過ごす日々が、刻々と消えていきました。五人でのどのような生活が待っているのか、ときに不安が頭を擡もたげました。その思いを消したくて暇ひまを見つけては、桜井とサイクリングに出ました。狛江こまえは駅前駅前に森が広がり、駅前広場でドングリやシイの実が拾えました。わが家から駅へ続く道の道にも、百円の野菜スタンドが数カ所ありました。新宿しんじゅくまで三十分とはとても思えない閑静かんせいな環境かんきやうです。駅やスーパーマーケットにも徒歩十分です。二人とも田舎的な狛江こまえが気に入りました。私は新宿駅経由で会議に出て、夜遅く帰宅おそする時に、狛江こまえ辺りに住めたら楽だろうな、と考えていた藤沢時代を思い出しました。

4

「おとうさん、八一八〇ってなんの数字なの」

市役所や銀行の手続きのときに、桜井は市民カードと新規に開設した銀行口座の暗証番号を八一八〇で登録したのです。市役所や銀行に行くのは私なので、おぼえやすい数字がいいのですが、この番号には思い当たることがありません。

「うん、僕ぼくが好きな数だから」

私は何回か八一八〇と唱えてみました。このときには、後に八一八〇の数字が大きな意味をもつことになるとは思いませんでした。

十一月になり寒さが忍しのびこんでくると、歌織は私が帰ってしまったあとの不安を訴えるようになりました。歌織たちの引ひ越こし予定日は十三日木曜日でした。

「そんなに心配ならば、必要な物だけ持って狛江こまえにきてしまったらいいんじゃないの。私もそのほうが楽だし」

と、提案しました。

翌九日の夕方、雨の中、歌織がかれんを抱き、誠くんが必要な物だけを持って玄関げんかんに立ちました。家族の姿が大きく変わった瞬間しゅんかんでした。

桜井が、ぎこちない手つきでかれんを抱だきました。その桜井とほとんど顔を合あわさず、誠くんは早々に二階の自分の部屋に上がってしまいました。夕飯もいらないと言

います。歌織は落胆らくたんしていましたが、桜井も私もあえて引き止めませんでした。無理もないのです。誠くんは、これから物書き夫婦とその娘むすめのなかで暮らしていかなければならないのです。かれん以外は血のつながっていない他人です。私たちもまた、誠くんへの接し方を考え直さなくてはと思いました。歌織も誠くんも、夫婦だけの自由はなくなつたのです。

十三日に歌織たちの荷物が届きました。その日には誠くんは、皆みなと食事をし談笑していました。案ずるより産むがやすしでした。五人が家族として一つになつたのはよかつたのですが、私は家事の大変さにたちまち疲つかれてきました。なにもかも桜井と二人の時の三倍のエネルギーが必要で、とくに食事に関しては、凄すごい！の一言でした。フライパンも一番大きなサイズにし、大鍋おおなべを買い足しました。歌織の産休が終わつたらどうなるかと思うと、暗澹あんたんたる気持ちになりました。

そして、たちまち歌織はまた出版社に戻もどつていきました。

誕生日を迎むかえる一カ月前、かれんは保育園に入園し、朝は誠くんの車で歌織が送り、帰りは私が乳母車うははるまで迎えに行きます。家事の量の多さに、いつ倒たおれるかと思うほどでした。

「お醤油しょうゆをボトルから醤油差しに移すのさえ辛つらくなるなんて」

と、私が眩くらくと桜井は、

「僕ぼくが番頭で、信子が仲居になる日がこようとは、想像さえしなかつたね」

と、しみじみ言いました。桜井は私より十六歳年長で、体力もかなり落ちています。それでも会合に出席し、単発の原稿げんこうも書いていました。なおかつ、食器洗いに買い物にと、こまめに動いてくれました。

誠くんは連日、歌織も週に一、二回は深夜の帰宅になります。歌織が心おきなく働けて、かれんに怪我けがをさせないように、その想いだけで私は自分を棄すてていきました。

どうにか寝ね込まこまずに、狛江こまえの住民になつて三年が過ぎました。かれんは保育園が大好きになつていましたが、頭痛持ちであることがわかり、検査、検査に走り回りました。「原因は分かりません。あるいは一生付き合うかもしれませぬ」

どの病院でも言われました。それでも、かれんは確実に成長し、狛江の自然にほつとできるときも見つけられるようになりました。

多摩川たまがわからの雄大な眺めなみ、夏にはカブトムシやクワガタが庭先にやってきて、かれ

※ 多摩川：山梨県、東京都、神奈川県を流れる全長約 138km、流域面積約 1,240km²の一級河川。下流域は東京都と神奈川県の間にもなっているが、首都圏にありながら川辺の自然が残る河川である。

んを喜ばせました。コウモリが夕焼けの空を飛び、ヤモリがキッチン窓に張りついていたりもします。庭に砂場を作り、かれんの頭痛を和らげようと思いました。

かわいい子を ひとり

かわいい子を わざと

とおい田の みまわりに

やあ

ひとりだちよと

いかせたものの

やあ

日がないちにち

こころのこりよ

こころんこりよ

あいさ あいさ

あいさ あいさ
あいさ あいさ

『なげいたコオロギ』古代歌謡変奏 — かわいい子を — をより抜粋

桜井はかれんを得て再び、こどもの愛おしさ大切さと向き合う日々になっていました。『かわいい子を』の神楽歌で始まる古代歌謡を独自に訳した『なげいたコオロギ』の出版が決まりました。出版元は「編書房」です。

一匹のコウロギが描かれた風雅ある装丁に、桜井は久しぶりに高揚していました。しかし、私は桜井の目に見える老いがとても気になりました。七十歳を過ぎからの引越は、命を縮めるといいます。まして桜井の場合は、その後の生活が体力的に過剰でした。

春は花粉症に悩まされ、夏の暑さに弱い桜井です。自室は寒いくらいクーラーを効かせていました。なんとか二〇〇七年の夏を、乗り切ろうとしていたときでした。

「あすなろから『西遊記』のこども版を書いて欲しいと依頼がきたよ」

あすなろ書房は、桜井の筆力を評価してさまざまな児童書のシリーズを依頼してき

※ 『西遊記』：16世紀の明の時代に大成した中国の伝奇小説。唐の僧・三蔵法師が白馬に乗って三神仙（神通力を持った仙人）、孫悟空（そんごくう）、猪八戒（ちよはっかい）、沙悟浄（さごじょう）を供に従えて、数々の苦難を乗り越え天竺へお経を取りに行く物語。

※ 古代歌謡（こだいかう）：奈良時代から平安初期の書物、文書などに収められた歌謡の総称で、神楽歌、催馬楽などがある。「古事記」「日本書紀」「風土記」「万葉集」からも確認できる。変奏とは本来ある主題をいろいろな技法によって形を変えて表すこと。

た経緯があります。

「大丈夫だよ。まだまだ、書く力は残っているから。それに、編集はまた秋さんが担当してくれるし。飲む機会ができるし」

私の心配を桜井は打ち消しました。フリー編集者の秋山勇司さんとは何度も組んできました。同年齢の飲み友だちでもあり、阿吽の呼吸で仕事が捗るようでした。仕事は生き甲斐に繋がりがり桜井の顔に生気が蘇ってきました。そんな折でした。

「おやじが危篤なんだ」

私の弟が連絡してきました。糖尿病で入院中だった父は、その日の深夜に永眠しました。享年八十九歳でした。父は度々入院を繰り返していました。私は父の死を淡々と受け入れ、喪失感はありませんでした。

父の葬儀などに追われ、たちまち年の瀬を迎えました。桜井は順調に『西遊記』の資料を読み進め、構想を練り始めました。私も仕事が滞りなくこなせて、家庭内の車が、順調に回転していると思った矢先のことです。

「かれん、どうしてこんなことをするの」

保育園から帰ると、かれんが砂場の砂を庭に投げ、おもちゃを踏み潰すようになり

ました。

「だって、ようこちゃんがかれんを倒してぶつんだよ」

あまりにも暴れ方がひどかった日に、かれんを抱きかかえて問いただすと、かれんは泣きじゃくりながら、保育園での日々について話しました。以前の保育園に同年の子がいなくなり、同じ系列の保育園に変わった日からのいじめだったようです。二カ月も耐えていたことになりました。

その夜、歌織の帰宅を待つて切り出しました。

「もう、明日からはあの保育園には行かせません。狛江通りにあるモンテッソーリ幼稚園の門を叩いてみようと思うの。幼稚園は保育の時間が短いから、私の時間がなくなつて大変になると思うけれど、かれんの辛さを思えばね」

翌日、かれんを連れて訪ねました。園長先生は優しく受け入れてくれました。

かれんは、二〇〇八年一月九日から『ハルデン・ニーニョ モンテッソーリコードもの家』へ通いだしました。楽しそうに通園するかれんにほっとしましたが、私の個人的時間はほとんどなくなりました。

「私、会社を二月でやめようと思うの」

※ モンテッソーリ：子どもの自主性を伸ばす教育法で、潜在的な力を引き出すメソッド（方法）として、20世紀初頭マリア・モンテッソーリ（イタリア）によって考案された。日本でもこのメソッドを採用した幼稚園が各地にある。

こどもの本の編集者として九年間頑張ってきた歌織です。かれんが落ち着いたと思つた矢先の突然の宣言でした。

「いろいろあつてね。週一の深夜帰宅にも疲れたし」

出社前に英会話を学び、母になつての絵本作りに燃えていました。でも一度折れてしまった心を修復するのは簡単ではありません。

正直私はほっとしました。かれんに関わる時間の多さに疲れが溜まっていたからです。桜井にも最大限に気を遣わなければ、と思うようになってしまいました。

二月を乗り切れば自分の時間がもてる、その思いで頑張る日々になりました。ところが歌織は残務処理が多く、二月は連日深夜の帰宅でした。誠くんも二年前に転職した会社はより残業が多く、かれんはパパ、ママの顔を忘れるのでは、と心配するほどの毎日でした。

私は疲れがひどくなり『西遊記』に本腰を入れ始めた桜井に助けを求めるしかありませんでした。就寝前になると桜井はそれまで以上に、私の肩を丁寧に揉んでくれるようになりました。

歌織が退職すると私の頑張りの糸が切れ、三月二十日の夜中十一時過ぎに、私は階

段下に倒れてしまいました。

「おとうさん、おとうさん」と、桜井を呼びつづけていたようです。それから翌日のお昼ごろまでの記憶がまったくありませんでした。救急車で慈恵医大病院（東京慈恵医科大学附属第三病院／狛江市）に搬送されて、点滴を受けたことも覚えていないのです。桜井は病院で一晩中、私を見守っていてくれました。それから二日間も眠りつづけました。

数日後かかりつけの医師に聞くと、

「よほど疲れていたのか、ストレスのようですね」

と、言われました。歌織たちとの同居後の凄まじい疲れが、精神的にも肉体的にも限界を超えてしまったのです。

5

「そうだ、コピー機の調子が悪いんだ。長年使ってきたから買い替えどきかもしれないな」

『西遊記』を書き始めれば、頻繁にコピーを使います。桜井はせっかちな性格で、

歌織の同行も拒みすぐに新宿まで買いにいきました。

私の体力が回復し、桜井も元気が出て、執筆に取りかかれるまでに構想も固まっているようでした。

「おとうさん、コピー機は絶対に送ってもらってね。重いから持って帰らないでね。体を痛めるからね」

桜井は自分の体力を過信しているところがありました。幼少期に病弱だった桜井は、加齢とともに健康体になったのですが、七十六歳の年齢では、重いものを持って肺や心臓に負担がかかります。歌織も「私も嫌な予感があるの」と言いました。

案じた通り、桜井はコピー機を自転車の後部の荷台に積んで、曳いて帰ってきました。あれほど、送ってもらおうようにと言ったにもかかわらずです。

「店員がね、送ると言うと言倒れとさそうにして、だったら持って帰るからってね」

青く血の気のない顔をしながら言いました。桜井は誰にでも優しく包容力があるのですが、理不尽に侮辱されると自尊心が大きく傷ついて対抗心が燃え上がります。それで、重いコピー機を抱えて電車に乗って家に帰ってきたのです。

身体が沈み込みそうな危惧が、私の胸に広がりました。

歌織と一緒に行かせなかったことを、ひたすら後悔しました。

「今日から書きだすよ。こどもの日だからね。こどもたちへの『西遊記』でもあるからね。僕の最後の仕事になるかもしれないし」

目の下の隈も大分薄くなり笑いかけながら、桜井は朝食の席に着きました。機嫌のよいときの笑顔です。よほどのことがない限り桜井は、機嫌が悪いようすはなく日々を淡々と過ごしていました。夫婦喧嘩は三年に一度くらいはしますが、すぐに桜井側から降参をしてきました。私が口を利かなくなるのが、なにより辛いからです。

桜井はどのような作品でも、書き出すときには文章の冒頭から結末までが頭の中で完成されていました。一、二章を書き、それを編集者に渡してしまい、次に最終章を書き、また三章へ戻るといふ芸当ができるのです。私は自分でも嫌になる悪筆の上、何度も推敲を重ね、それでいながら登場人物名を間違えたりします。

文は人なりのです。何事にも丁寧さと緻密さを持つ桜井と、粗忽でいい加減に妥協してしまうのが私です。

花粉症からも解放され爽やかな季節のなか、桜井は順調に書き進んでいました。

五月三十一日の土曜日でした。私は藤沢の講座に出かけ、帰りに母の誕生祝いを兼ねて、鶴川駅前でも一緒に昼食をとって四時過ぎに帰宅しました。誠くんは休日出勤でした。歌織が支度した夕食を済ませると、

「じじはちよつと図書館へ行つてこようかな」

と、桜井が薄手のジャンパーを羽織りました。

「かれんちゃんもじじといく」

かれんが玄関へ走ると、歌織も一緒にとなり、三人で出かけていきました。

ひとり残り、食事のあと片づけをしていると、電話が鳴りました。

「じじが倒れたの！ 狛江通りのセントラルハイツの前。いま救急車を呼んでいろの」

歌織の悲痛な声が聞こえてきました。

私は桜井の保険証を用意し、財布の金額を確認して家を出ました。コピー機を持って帰った日から、このときがくるような覚悟ができていました。その一方で、『西遊記』を書かせてあげたいとの思いも強くしました。

また、今日は大丈夫との安心感も湧いてきました。私にはほんの少し予知能力があるようで、気持ちに素直に従えばその通りになってきたことが何度もありました。

狛江通りのセントラルハイツの前は、騒然としていました。かれんは歌織の腰にしがみついて、泣いています。桜井が倒れる瞬間を目の当たりにしたはずです。桜井はすでに救急車のなかにいました。

顔に血がついていましたが、私が右手を握ると強く握り返してきました。

「あの、この方とはどういう関係ですか」

救急隊員が聞いてきました。戦前生まれの桜井と戦後生まれの私では、顔付きに歳以上の差が感じられるようです。

「妻です」

と応えようと、隊員は少し驚いた顔をしました。

「大丈夫なの、痛くないの」

声をかけると、私の手を握ったまま、いつものはにかんだ笑顔で大丈夫だよと返してきました。

「左頬骨が砕けていますが、手術は避けたほうがいいでしょう。レントゲン写真を持って月曜日に慈恵医大病院へいらしてみてください」

搬送された調布の救急病院の診察結果はあつけないものでした。化膿止めの抗生薬

を処方され、迎えにきてくれた誠くんの車で帰宅しました。翌日も顔が腫れることもなく痛みもありませんでした。食欲も変わらずにありました。

慈恵医大病院の診断も、調布市の病院と同様でした。

「一週間後にまたいらしてみてください」

医師の言葉を桜井はうれしそうに聞いていました。

「僕も手術なんてする気はないんだ。元々鼻曲がりだし、入院すれば原稿が書けなくなるし」

桜井は痛みにとっても強いのです。ほかの面でも我慢強さは、超人的でした。

一週間後の慈恵医大病院の診断も、自然治癒でということになりました。

『西遊記』の船はまだ引き返そうと思えば引き返せます。でも、船長にその気はないようです。挿絵画家も佐藤や糸子さんに決まりました。佐藤さんは二人の子のお母さんで、こどもの目線で躍動感ある悟空を描いてくれそうです。

狛江での五度目の夏を迎えました。狛江は自然に恵まれ緑も多く、多摩川の流れがあり暑さがしのぎやすい土地です。百円の野菜スタンドには新鮮な完熟トマト、キュウ

ウリ、ナス、カボチャにトウモロコシが並びます。魚介類は藤沢とは正反対で、新鮮さも種類のなさも嘆きたくなりました。それでも、家族みんなが狛江を大好きになっていました。とはいえ、桜井の部屋はすでにクーラーが入りつづけていました。

本格的な暑さがきたころからでしょうか。私は桜井の日常的な行動や会話に違和感を感じるようになりました。時に目の焦点が合わず、会話が一方通行になるのです。

それでも、仕事の流れに問題はないようで、何章か書き上げては秋山さんに送っていました。秋山さんは疑問なく読んでいるようです。

かれんにとっては、初めてママと過ごせる夏休みでした。

「ママ、ママ」

かれんは歌織を追いかけていました。歌織は母校の大学での事務職勤務の話が浮上してきていました。

「ねえ、八月下旬に八ヶ岳にいこうと思うのだけれど、高原ロッジ予約してもいいわよね」

高原ロッジは、カラマツや白樺の林の中に建つ趣のあるホテルで、とくにかれんが気に入ってました。

※ 八ヶ岳：長野県の諏訪と佐久地域、および山梨県の境にある山塊。南北30 km あまりの大火山群。深田久弥が選定した「日本百名山」の一つ。最高峰の赤岳は標高2,899 m。

こどもたちとは部屋を分け、昼間も別行動で、お互いに息抜きができます。いつの間にかそれが旅行の定番になっていました。私は食事の支度をしなくてすむのが幸せで、何より桜井と二人だけの時間があるのがうれしくもありました。

ところが、八月に入ると八ヶ岳いきを躊躇するほど、桜井の痴呆的言動は進行してしまいました。会話も度々噛み合わなくなっていました。それでも桜井も私も病院へいくという考えは浮かびませんでした。桜井は日ごろから、

「絶対惚けたくない。寝たきりになりたくない。病院で死にたくない。信子の腕の中であつという間に死にたい」

と、公言しているのです。

連日の炎暑で疲れが蓄積してきているせいか、よりほんやりしているときも多くなりました。

「おとうさん、お昼ながいいの。おそうめんでもいいわよね」

「いいよ。いちごジャムがあつたよね」

私は素知らぬ振りをして、そうめんと好物の天ぷらを並べました。

「歌織、高原ロッジの前日に甲府辺りで一泊できないかしら。おとうさんが疲れてい

るようなので、八ヶ岳に一気にいきたくないのよね」

「うん、いいわよ。ここのところじじ変だものね」

歌織もさすがに気づいていました。

久しぶりの旅行に、桜井の快復への期待を寄せて家を出ました。助手席の桜井はいつもどおりの寡黙さです。対して後部座席の歌織とかれんは大変な賑やかさです。

私はひたすら桜井の横顔を気にしつつ、景色も目に入りませんでした。

甲府の宿での夕食は、私たちの部屋に一緒に用意してもらいましたが、桜井があまりにも静かなので誠くんも怪訝そうな顔をしていました。

「かれん、じじが疲れているみたいだからもうお部屋に戻ろうね」

かれんは大好きな桜井のそばにいたがりましたが、歌織が早々に連れ出しました。

その後、二人だけの会話ははずみ桜井は久しぶりに笑顔を見せました。私は焦点がすっかり定まっている目に安堵して眠りに就きました。

翌日は快晴のなかぶどう狩りを楽しみ、八ヶ岳へと向かいました。

到着して、夏季限定で高原ロッジが営業する中華料理店に席が取れ、

「おとうさん、なにを注文しますか」

メニューを桜井に手渡そうとして、心が震えました。桜井は顔色が悪く、目からまったく生気が消えていました。メニューを見ようともしませんでした。

食事を済ませると、歌織をせき立てフロントに向かわせました。高原ロッジは早めのチェックインができるのですが、この日に限って二部屋ともまだ清掃が終っていませんでした。仕方なく歩くことさえ辛そうな桜井をロビーの椅子に寝かせました。

桜井はどの旅でもホテルにチェックインするとまず一眠りするのですが、この日はベッドに横になれたのが午後三時半でした。いつものようにたちまち寝息が聞こえてきました。

夕食は高原ロッジから二十分ほど山を下った焼き肉レストランにしました。肉好きの若い二人は、高原ロッジ内のレストランの食事では物足りないのです。桜井の顔色も少しよくなりました。

「ビビンバにソースに野菜も、飲み物はなににする」

「もっと注文しないと足りないわよ」

料理が次々運ばれてきて、肉の焼けるいい匂いが漂います。焼けた肉を皆で一口頬張ったときでした。私の左隣りに座った桜井が生肉に手を伸ばし、なんとそれをその

まま口に入れようとしたのです。

「おとうさん、どうしたの！」

私は肉を奪い取ると立ち上がりました。誠くんも歌織もかれんまでも凍りついていました。桜井は自分がなにをしようとしたのが、わかってさえないようです。

「歌織、今すぐおとうさんを病院に連れていきたいの」

私は脳梗塞を疑いました。歌織が店長の所へ走っていききました。かれんが泣き出し、私も涙が溢れました。このまま一気に病気が進行するのでは、という不安が押し寄せてきました。

「ここには、佐久総合病院という大変有名ないい病院があるんですよ」

女性店長の落ち着いた対応に、私も少し落ち着いてきました。

歌織が病院に連絡をし、分院のほうに近いことがわかりました。

私が救急車ではレストランに迷惑と思っ呼んだタクシーの中で、桜井の手を握りつづけました。

桜井もしっかりと握り返しています。二十分ほどで着いた分院は、思っていたより大きな規模で、すぐに診察室に呼ばれました。

「右手の人差し指で私の鼻を指して、自分の鼻へ持って行ってみてください」

若い医師の指示に、桜井は私の顔を見上げてはにかみの笑顔を見せるだけで、指は立てたまま宙に浮いていました。

「最近頭部をぶついたりしたことはありませんか」

医師に聞かれ、五月の出来事を伝えました。頭部のCTを撮った結果、

「慢性硬膜下血腫と診断されました。その五月のことが原因と思いますが、加齢すると激しい揺れでもなることがあります。これから救急車で本院へ行って詳しい検査を受けてください」

と言われ、CTフィルムには、頭蓋骨の内側全体に黒く血液が映っていました。私も、急を要するということがわかりました。

救急車が到着すると同時に、誠くんの車が駐車場に走り込んできました。

「これから本院へいくので付いてきてね」

救急車のなかで桜井の手を握りながら、五月末からのようすを思い出していました。徐々に痴呆的になり、そして一気にきたこと。その一気なんだったのかも思い当たりました。高原ロτζジへのプロムナードへ入る道に、スピード抑制の凹凸を施し

た箇所がありました。そこを通過するとき、車が激しく上下に揺れました。高原ロτζジへ向かうときと焼肉レストランへいくときと、往復二回通過したことが一気にきた原因と思いました。目を閉じている桜井を見ていると、愛しさがこみ上げてきました。

かぜのこえ

かぜのこえは あこのこえ

かぜのこえを ききたくて

はしれば みみもとに

あこのこえ

そらのふえのような

うみのうたのような

いつか えがおのむこうに

さよならがあっても

あのこのこえは かぜのこえ
あのこのこえを ききたくて
はしれば みみもとに
かぜのこえ

詩集『きみがすき』（ポプラ社）より抜粋

桜井は多くの詩作をしてきましたが、そのなかに相聞歌は一編もありませんでした。「桜井くんは、相聞歌は書けないよ。相聞歌は愛への願望だからね。これだけ相思相愛だと相聞歌は生まれないな」

桜井の親友の山崎信而さんが、かつて私たちを前に言ったことがありました。私はそれでも少々不満でした。相聞歌を書いて欲しかったからです。そして、詩集『きみがすき』が出版され手にしたとき、それは形を変えた私への相聞歌と確信しました。

いつか えがおのむこうに
さよならがあっても

繰り返し心に浮かべながら、涙が頬に伝わらないように救急車の天井を見ている。救急車が佐久総合病院本院に到着しました。

佐久の本院では、明日まで待たないほうがよいと判断され、すぐに手術となりました。

医師の言葉は柔らかでしたが、切迫した緊張感がありました。日曜日の夜九時過ぎに手術ができることに驚き、誠くんと椅子に並んで座っていると、導かれるごとく佐久総合病院にいる幸運を感じました。

病院のある長野県は私の故郷です。桜井も青年時代のスキーが縁で、知り合いがいます。二人に縁ある長野で、桜井の命が救われたのです。東京で同じことが起きたら助からなかったかもしれません。神が桜井を影護していると思えませんでした。

十一時十分、医師が手術室から出てきました。

「無事に終わりました。今は麻酔で眠っています。明日いらしてください。受付でわ

かるようにしておきますから。一週間ほどの入院になります」

高原ロッジへの帰路は小雨でした。

「ちゃんと焼き肉は食べられたのかしら、かれんは大丈夫だったかしら」

やっとそんな会話ができました。

「いろいろごめんね。でも、奇跡のように良い病院に巡り合えたんですね。きつと神様が『西遊記』を書き上げなさいって守ってくれてるのよ」

「東京だったらだめだったかもしれないね」

誠くんもそう言いました。

高原ロッジに戻ると、夜中の十二時を回っていました。

二人で泊まるはずだった部屋のベッドに桜井はいません。寝息もありません。間接照明の薄暗い部屋が、突然水底に思えて震えました。寂しさがまとわり付いて胸が苦しくなりました。しかし、このときの寂寥感でさえ小さなものであったと、のちに知りました。

6

野鳥のさえずりを聞きながら、わずかに微睡みベッドから立ち上がりました。

「ばば、おはよう」

かれんは元気ででした。高原ロッジのビュッフェ式朝食は美味しく、かれんは沢山食べました。誠くんも歌織も昨夜の食事を兼ねて健啖でした。テラスにはコガラやウソがきて餌を啄んでいます。遠くに秩父連山が見えます。私も沢山食べました。

入院病棟は六階で、桜井は六人部屋の中央ベッドに、頂頭部に管が付けられ寝ていました。

「おとうさん、みんなできたわよ」

「ありがとう、かれんちゃん心配かけてごめんね。皆に助けられたんだね」

桜井が左手を差し出しました。私は両手でその手を握りしめました。見慣れた眼差しが戻っていました。

翌日、帰京の途中再び病院を訪れると、頭の管が外されベッドに座っていました。

「おとうさん、四日の水曜日に私が一泊しながらくる予定にしたいのだけれど、一人で大丈夫よね」

七日の日曜日に退院を希望し、私が四日には来院する旨を伝え、そのほかすべてを病院側に託しました。別れ際、桜井はベッドから手を振っていました。

佐久からの高速道路は関越道です。桜井が座る助手席に私が座りました。

「じじ、わらってたねえ」

かれんは幼な心ながら、ほっとしたのでしょう。狛江通りで桜井が倒れたときも見てしまい、今回もレストランでの桜井の理解不能な行為を目の当たりにしたのです。大好きなじじである桜井の悲運を、そのあともかれんがすべて見てしまうとは、このときは考えも及びませんでした。

四日には、長野新幹線と小海線を乗り継いで佐久総合病院に行き、桜井の笑顔に再会しました。

「あのね、レジ袋が何枚か欲しいんだ。僕がね、毎日パンツを捨てるとね、掃除の方がね、もつたないって言うんだよ。百円パンツだけだけど確かにもつたないかもしれないし。でも、今僕は洗濯できないし、それより使った下着を見られるのは嫌なんだ。レジ袋に入れてわからないように捨てるから」

声に覇気がありました。その第一声が、パンツに対する桜井らしい羞恥心だったの

で笑い出したくなりました。私は軽快に売店へ行き、レジ袋を五枚もらってきました。

「明日はシャワーが浴びられますって。それに『なげいたコオロギ』が届いていたわよ」

二〇〇八年九月十日の奥付で『なげいたコオロギ』が上梓されました。

医師と看護師、世話になっている方々にお礼代わりに『なげいたコオロギ』を贈呈しようと思いついたのです。編書房代表の國岡さんに、二〇冊を佐久総合病院気付で送ってもらいました。桜井は帰宅を待たずに、手にすることができたのです。

翌五日は桜井に付き添い、シャワーを浴びせ、迎えに来る七日の段取りを確認して帰りました。桜井は病院の玄関で手を振りつけていました。

七日に誠くんの運転で無事退院し、術後の経過は慈恵医大病院での診察となりましたが、手術の傷口も順調に快復していました。

十月の声と同時に『西遊記』一巻が挿絵も入って校正ができました。佐藤さんの挿絵の悟空の表情が、生き生きとしていてこどもの心にすうっと落ちそうでした。

「秋さんは、手術後の原稿も手術前の原稿も変わらないって言ってくれてるよ」

秋の清々しい風の中、三蔵法師の旅は順調でした。

一方、私は大変な日々になっていました。歌織がかれんの誕生日の十月一日から、母校で働きだしたのです。家事とかれんの世話が、再び私の双肩に一気にのしかかってきました。

「いいよ。僕には気を遣わないでいいよ」

桜井はそう言いますが、また倒れたらとの危惧がどうしてもつきまといまいます。まして、『西遊記』の船は、もう目的の港に着岸するしかないのです。

桜井にお茶を出し、買い物に走り、夕飯の下ごしらえをし、残り物で昼食を終える。とたちまちかれんの迎への二時になります。かれんが帰れば、

「ばば、あそぼう、どっか行きたい」

の連続になります。

「僕が番頭で信子が仲居だね」

同居したころの桜井のそんな比喻は、まだ余裕があるときの言葉でした。番頭は職を離れ、仲居はそのままに番頭分もこなさなければなりませんでした。私は食べても太らなくなりました。二人でのんびりと旅をし、本を読みたいだけ読んでいた藤沢時代へ戻りたいと思うほどでした。

床暖房を入れ始め、少し手抜きができる鍋料理の美味しい季節になりました。

十一月に二人で佐久総合病院に出かけ診察結果は良好でした。今のところ硬膜下血腫再発の心配はないとの診断は、大いなる力になりました。

二巻目もほとんど手を入れずに校了でした。この時点で一、二、三巻までを一区切りで印刷し、残り七巻まで書き上がった段階でのセット販売が決まりました。

穏やかな二〇〇九年の新年を迎えて、桜井は三が日は箱根駅伝と年賀状の整理にあてて頭も身体も休めました。

正月が終わると、また孫育ての毎日です。寒さもともなうて肩も凝りつづけて、いらいらしている自分が嫌になりそうでした。ママが側にいないかれんも可哀想でした。なんとか心に潤いをおおと思ひ、犬を飼おうと決心しました。

歌織が小学一年生のときに飼い始めたケンが、歌織を守り、桜井と私に犬がいる生活の豊かさを教えてくれました。

春立つ日にわが家に来た黒いポメラニアンの子は、柔らかな風を運んできました。桜井も、休憩にはダイニングの椅子に座ってロッキーを愛で、確定申告も例年になく順調に提出しました。

「三巻目の初校しよこうが送られてくるし、花粉症かふんしよになりそうで外出はしたくないんだ」

たしかに桜井は、年々花粉症がひどくなっていました。花粉症の薬もすでに飲んでいましたが、風邪かぜに似た症状しよじょうは倦怠感けんたいを伴ともないました。

ロッキーマスターがきて一カ月になる、三月十四日土曜日でした。朝から春先の憂鬱ゆううつになる雨風あめかぜが吹き荒あれていました。低気圧ていきあつに弱い私は、心身しんしんが重おもたく桜井さくらいも疲れ気味きみでした。珍めづしく誠まことくんと歌織うたおりがそろっての休みなので、二人で午前中は横よこになっていました。

夕食後に歌織は新宿まで買い物に出かけ、誠くんは、

「かれん、雨がやんだからパパと散歩にいこうか」

と、二人で散歩に出ていきました。

私は床ゆかの汚れよごしが気になり、掃除機そうじをかけ始めると、何か物がぶつかる鈍い音にぶが聞こえました。ロッキーマスターがキッチンに向かって吠ほえ出し急いそいでキッチンを覗のぞくと、桜井が勝手口かたてぐちに頭あたまを向け、床ゆかに俯うつぶせて倒たおれていたのです。顔かほが血ちの中に埋うまっていました。

「おとうさん、おとうさん」

私は掃除機そうじを放り出して走り寄りました。

「うううん、うううん」

桜井は低く呻うなっていました。一刻も早く起こさないと、窒息ちっそくしてしまうかもしれません。

「おとうさん、おとうさん」

なんとか仰向けおほむけに起こそうとしましたが、偉丈夫いじょうふな体は簡単には起こせません。二度、三度力をふりしぼります。苦しそうな唸うなり声はつづいていました。

やっと仰向けにでき、

「おとうさん、しっかりして。三蔵法師さんぞうほうしが西へ行けなくなるでしょ」

桜井の体を強く揺ゆすりつづけました。

「ふううう」

と、大きく息を吐はき、それを見届けて一一九番と歌織に連絡れんらくをしました。

四、五分でサイレンの音がして、チャイムが鳴りました。数名の救急隊員きゅうきゅうたいいんが走り込んできて、桜井のようすを確認たんかして担架たんかに乗せました。

「奥さん、ここを拭ふく物ものがありますか」

床ゆかに血液けつがが広がっていました。隊員たいいんに言われて私は慌あわてて二階にがいにタオルを取りにきました。キッチンに戻もどってきてタオルを渡わたして、気がつきました。シンクの取っ手

にはつねに二枚のタオルがかかっていたのです。いかに気が動揺しているか、自分で認識できました。ロッキーは吠えつづけています。

救急車に桜井が運ばれ外に出ると、誠くんがかれんを抱いて門扉の所にいました。かれんは誠くんを抱かれて泣いていました。

「やっぱりおとうさんだったんですね。サイレンが家の方に向かっていている気がして戻ってきたんです」

かれんは桜井の痛々しい姿と、救急車と消防車の連なりに怯えきっていました。かれんにとっては三度目の衝撃でした。

慈恵医大病院で左眉毛の上と眉間の下の二カ所の裂傷を縫い、このときも入院することなく帰宅できました。本当によほど神に守られているのでしょうか。それに『西遊記』を書き上げねばと思う気迫が、起き上がり立ち直らせるのだと思いました。倒れた翌日にはペンを持っていました。私はこの三度目の衝撃的な出来事で大きな覚悟をしました。

母親に甘えるように桜井に甘えてきた自分と、訣別しようと決心したのです。毎日、桜井の膝の間に入りこんで、肩や腕を揉んでもらってきたこともやめようと思いまし

た。桜井さえいればなにも怖くない、と思う依頼心も捨てました。桜井の残された日々を、全身全霊で支えようと思いました。私が四十八歳の折り、自律神経を病み苦しんだ半年間、桜井は毎晩私を抱えつづけて寝かせてくれました。そのお返しでした。

狛江に住んで六度目の桜の季節を迎えました。狛江はとても桜の美しい街です。多摩川べりや六郷さくら通り、野川に沿ったふれ合いの道も、花いっぱい彩られます。桜井と一緒に桜を愛でに行きたいのを我慢し、一人で多摩川の河川敷に自転車で行ってみました。

「今年も綺麗だったわよ。凄い人出だった。川への入り口に屋台が五軒出ていてね。来年は一緒に行きたいな」

「そうだね。『西遊記』も書き上がってるから行けるよ。でも、僕は信子が満足すればそれでいいんだけどね」と、桜井は応えました。来年の二〇一〇年もその先の年もそれこそ永遠に、桜は二人で見たいと思いました。

四月二十四日金曜日、ロッキーを初めて獣医師に預けて、八ヶ岳に家族みんなで向

かいました。佐久総合病院での診察と行楽を兼ねてです。甲府盆地は桃の花が満開で、高速道路の両側は淡い桃色の絨毯になっていました。

「なんてきれいな」

「まさに桃源郷の眺めね」

私と歌織は感嘆の声を上げつづけていました。そのときです。かれんが、

「じじはスーパーおじいさんだよ。いつも生き返ったものね」

と、眩いて、皆を笑わせました。

「じじはもう救急車にのらないよね」

美しい風景のなかでも、幼いかれんが桜井を心配しているのに胸が痛くなりました。

「大丈夫よ。もう元気になってるし、こうして皆と一緒ににお山にいかれるもの」

私はいかれんに応えながら、心の奥では今度救急車に乗るときは、それはさようならのときかも知れないと思いました。

佐久総合病院での診察も、脳に異常はありませんでした。復路も美しい桃源郷のなかを無事帰りました。そして、五月下旬には三巻目を脱稿しました。

「おとうさん、あんまり根を詰めないでね」

「大丈夫だよ。今年中には書き上げられると思うから。二人でまた京都にも行きたいしね」

いくつものしたいことを話す桜井でしたが、そんなささやかな願いも結局果たせませんでした。このころからときに苦しそうな息をするようになり、私は携帯用の酸素吸入器を買って桜井の机に置きました。

こどもたちに楽しく読める『西遊記』を届けたい。その一念が桜井を奮起させ、まさに生命を削る日々でした。

六、七月と比較的凌ぎやすく、四巻、五巻と順調に書き上がっていきました。予定通り、三巻までが製版され桜井の手に届きました。挿絵の悟空の目に命が宿り内容を引立て、こどもたちが喜んで手にできる本になっていました。毎日新聞に広告が掲載され、いよいよ全七巻そろっての出版が見えてきました。あと六巻、七巻と書けばよいのです。私は祈る思いで桜井の体調を気にかけてつづけました。

秋めく気配が感じられた九月中旬に、四巻目、五巻目が校了になり、毎年楽しみに迎える伊豆美神社の秋祭りになりました。

この祭りは心に沁み入る素材があります。正午前こどもたちが曳く大太鼓を乗せ

※ 伊豆美神社：関東三大鳥居（日光東照宮、鶴岡八幡宮、伊豆美神社）のひとつ。平安時代、宇多天皇の時世に「六所宮」として関東一円の主要神社が祀られる。武蔵国で最古といわれる石の鳥居は1651年の寄進。

※ 桃源郷（とうげんきょう）：仙境、理想郷。俗界を離れた別世界をいう。中国の魏晉南北朝時代（184～589年）、「桃花源記」（陶淵明著）に描かれた桃林に囲まれた平野で豊かな別天地が出所とされている。

た山車とお囃子の山車が出発し、最後に大神輿が宮出しします。行列は半日をかけて市内の西部地区を廻り、夕闇が神社の森を包むころ山車、大太鼓に神輿が帰ってきます。

狛江にきて初めてこの宮入りを迎えたととき、桜井も私も涙ぐんでしまいました。新宿からわずか三十分の地の、詩情ある祭りに感動したのです。

そのことを思い出しながら、

「もうじき宮入の時間になるけど行ってみると、誘ってみたいです。」

「うん、行ってみたいけど夜道だし、信子が楽しんでくれば僕はそれでいい」

桜井は少し寂しそうに、玄関で見送ってくれました。

十月一日、かれんが六歳の誕生日を迎えました。その数日後、六巻目の原稿を私が秋山さんに送りました。

九日の金曜日には、かれんの幼稚園の運動会を桜井も交えて家族全員で見学し、その足で八ヶ岳へ向かいました。桜井にとっては久しぶりの戸外でした。かれんの走る姿を、遠目のベンチからうれしそうに観戦していました。

翌日の佐久総合病院での受診では脳は何事もなく、私は桜井の肺の不調を伝えようかと迷いましたがやめました。言ったがために入院にでもなれば『西遊記』は書けなくなるでしょう。桜井もそれを懸念しているのがわかりました。

八ヶ岳から帰った翌日には、ペンを執っていました。資料を読み返すこともなく、頭のなかにでき上がっている物語をひたすら書き話めていきます。

沙羅の木を追うように、南天も紅葉し始めました。狛江で迎える七度目の秋になり、十八日は桜井の喜寿（七十七歳）の誕生日です。なにか特別なお祝いの食事をおもっていた前日でした。市の民生委員が来訪して、

「おめでとーございませう。喜寿のお祝いをお届けにきました」と、祝儀袋を差し出しました。まったく予期していなかった私は恐縮してしまいました。

祝儀袋の中には、新券で七千円が入っていました。

向寒の急な冷え込みに、私が体調を崩して血圧を上げてしまい、心配した桜井は二日ほどペンを置き、私の側に来てくれました。家事は歌織に休暇をとってもらい、なんとか体調が戻ると、また桜井は自室にこもりました。

※ 南天：(学名：Nandina domestica) メギ科の常緑低木。初夏に白い花が咲き、晩秋から初冬にかけて赤い小さな実がなる。音が「難転（なんてん）」すなわち「災い転じて福となす」ともいわれ縁起の良い木とされる。

そして、二〇〇九年十一月二十四日火曜日、正に大安吉日に桜井は、「信子書き上がったよ。いろいろありがとう。これは僕が秋さんに送りに出かけてみるから」

桜井は満面に笑みを浮かべて、リビングに下りてきました。

孫悟空は、あたまに手をやってみた。金輪はない。それがなぜか、さびしいような気がする。

孫悟空は、ひとりで、霊山のいただきにのぼった。

「このおれが、仏になったとは、しんじられないな……」

はるかにとおくまで見たせば、雲のあいだに、ちらちらと、下界のけしきが見える……。

子ども版『西遊記』（あすなる書房）より抜粋

と結末を綴り、子ども版『西遊記』全七巻をついに書き上げました。構想から二年半の歳月が流れ、三度の予期せぬ出来事を乗り越えたのです。

「おめでとー。これからゆっくりしてね」

私は言いながら、桜井の顔をしみじみ見つめました。その顔は安堵と疲労が入り交じり、見慣れない桜井の顔になっていました。

「まだ、六巻、七巻の校正はあるけれど、なんだか虚脱感に襲われそうだよ」

「だめ、また詩に戻るって言っていたじゃないの。それに京都にも行くんでしょっ」

桜井は領きを半分にしたように笑い、原稿を送る伝票を書いていました。杖を衝きながら通りへ出たその背が、あまりにも丸く老いて見え、

「おとうさん、おとうさん、気をつけてね」

と、呼びかけてしまいました。

十二月十七日、子ども版『西遊記』全七巻がセットで上梓され、安堵と喜びのなか二〇一〇年を家族揃って迎えました。桜井もなんとか徒歩で伊豆美神社に初詣に行き、父のいない私の実家へ年始の挨拶も揃って行きました。

寒さにも極端に弱くなっていった桜井ですが、住所録を新しくするための書き換えを始めていました。また、二月下旬にある児童文学作家の故・大石真（一九二五―一九九〇年）

さんの会の講演の準備も進めていました。講演当日は和光市（埼玉県）まで送迎をしてもらい、無事に重責を果たせ桜井は心から安堵していました。

春の衣に着替え、狛江で七度目の桜の季節になりました。

私が六十三歳の誕生日を迎えた翌日、また五人で八ヶ岳へ向かいました。八ヶ岳はまだ春遠く、前日の雨の雫が草木に氷着し雨水となつて、見渡す限りの草木がダイヤモンドを纏っていました。一粒ひと粒の雨水が陽を受けて、虹色に輝いています。翌日も輝きのなかを私たちは佐久総合病院へ、こどもたちはかれんの好きなメリーゴーランドのある『萌木の村』へと出かけました。

「そうですか、書き上げられたのですね。おめでとうございます。どうぞ、ご自愛なさつてまた秋にいらしてください」

この時も桜井は医師に、胸の苦しさを訴えはしませんでした。私も黙っていました。二〇一〇年四月、東風が気持ちいい朝、かれんは玉川学園の一年生になりました。

歌織が同じ学園の入学式を迎えた日は、桜井も私もスーツに身を包み胸を熱くしながら入学式に臨みました。その日から三十年もの歳月が流れていったのです。私たち二人が年を重ね、歌織からかれんへと生命が受け継がれたのを実感しました。

「じじ、ばば、ただいま」

式から帰宅したかれんは桜井に飛びつき、桜井はよろけながら抱きとめて、「おめでとう。お友だちになれそうな子はいたかな。ママのときのようにじじが送り迎えはできないけれど、気をつけて電車に乗るんだよ」

かれんに語りかけました。歌織の入学時には二カ月間送迎をしたからです。

桜井はときに息苦しさはありましたが、家の中では比較的元気でした。住所録を書き換え終えると、明るい顔で言いました。

「大きくて丈夫そうなダンボールが三、四個欲しいのだけれど。かれんにも歌織に作ったと同じお人形の家を作つてあげようと思つてね」

桜井は何事も丁寧なうえにとても器用です。歌織のこども時代には私には作れない人形の洋服や靴を桜井が作りしました。歌織が『パコちゃん』と呼んで可愛がった、小さなクマのぬいぐるみの家もダンボールで作りました。その写真を見てかれんは、「じじ、かれんちゃんにもパコちゃんハウスを作つて」

と、せがんでいました。桜井の部屋にダンボールを重ねて置き、大きなカッターナイフも用意しました。

「じじ、今日はどこまでできたの」

かれんは帰宅すると、桜井の部屋へ駆け上がりました。二階建ての家の中にシステムキッチンとテーブル、椅子、ベッドにトイレ、浴室も作られました。そのほかに犬小屋やプール、劇場や仕掛けのある山も作られました。

「うわあ、すごい、すごいね、じじ」

かれんの歓声に応えようと、桜井は残る体力を注いでいるかのようでした。

「おとうさん、今年の朗読会、本当にいく気なのね」

七月三十一日土曜日の『ハテルマ シキナ』を全編朗読する会が近づいてきました。二〇〇八年は、狛江通りで倒れていけませんでした。翌年の第一〇回の記念朗読会も体調がすぐれず『西遊記』が引っかけかりいけませんでしたので、二〇一〇年はどうしてもいきたかったようです。ハテルマの会も、桜井が会場にいれば思いが違います。

しかし、例年より早めに来た暑さに体力が追い付いていないのを、桜井自身が一番感じてはるはずです。それでもいこうとする姿は、何か覚悟を感じさせ、私は胸がつまりました。

越谷（埼玉）は遠距離で、いくだけで体力を消耗します。三時間もの朗読を聞き、その後サインに応じ、当然談笑もするでしょう。それでもいかせない後悔よりも、いかせて後悔しようと思ったのです。

誠くんが車での送迎を引き受けてくれました。運悪く私はその日に講座があつて、つき添えません。だからこそ三十一日までになんとか体力を温存して欲しいと言いつづけました。

桜井の出席を会に伝えると、朗読会の出席者が大喜びしていると門馬さんから連絡がありました。

朗読会の当日、私は早朝に桜井の衣服や飲み物を用意して、「じゃあ、おとうさん絶対無理しないでね。おかしいと思ったら横になってね。できるだけ早く帰ってね」

と、言いおき、八時に家を出ました。二人が出かけるのは九時です。私は講座中も気がありませんでした。

——お昼はきちんと食べているかしら、呼吸は苦しくなっていないかしら……。と次々と心配が湧いていました。そして、二時過ぎに帰宅してひたすら二人の帰りを

待ちましたが、六時が過ぎ、八時になっても連絡がありません。八時半にやっと、「いま、東光苑に着いて食事をするところですよ」

と、誠くんが電話してきました。私はつい、

「どうしてこんなに遅くなったの。それに家に帰ればすぐに食事ができたのに」と、声を荒げてしまいました。

越谷を出るのが遅くなって、帰る道に食事ができる所がなかったので、桜井の好きな東光苑まできたとのことですよ。私はつき添って行けなかったことをひたすら後悔しました。

九時半、やっと車の音がして、

「ただいま、今日の朗読会は今までが一番素晴らしかったよ。こどもたちが何人も読んでくれて」

そう話す桜井の顔を見て背筋が凍りました。頬が瘦けて青白く、目が飛び出て見えました。

この日を境に、桜井は一気に息苦しさが加速しました。

「生命をかなり縮めたと思いますよ。朗読が終って挨拶をし、サイン会もして多く

の人と握手をしましたから。僕ははらはらでした。あの会場で倒れるのではないかと」

桜井亡き後、弔問に訪れた津田櫓冬さんがこの日の桜井のようすを話してくれました。

私は津田さんの話から、桜井はやはり覚悟をして朗読会に出席し、好きだった東光苑の中華そばを食べたかったのだと、改めて納得しました。

朗読会後はそれでも寝込むこともなく、家の中での日常生活は変わりなく過ごしていました。

八月五日木曜日に、狛江市主催の花火大会が多摩川でありました。歌織とかれんと一緒に私も見に行きました。でも心が落ち着かずすぐに帰宅しました。

「きれいだよ」

桜井は誠くんの部屋の窓辺に寄りかかりながら、花火を見ていました。わが家から花火が見えたことがうれしくなり、二人並んでしばらく見ていました。

二〇一〇年八月十八日水曜日、生涯忘れ得ない朝を迎えました。

十五日から三日つづけて夜になると黄金虫が私の部屋を訪ね、この間はしきりに桜井の来し方が思われ寝つけませんでした。とくに十七日から十八日にかけてはほとんど眠れずに、桜井を恋う思いを短歌にしたためたりして朝になっていました。

暑い朝でした。思考が働かずに、五時にベッドから抜け出してキッチンへ入りました。いつもの朝と同じに、朝食を作り始めました。そこへ桜井がきました。

「おはよう、どうしたの、こんなに早くに」

桜井は六時半を過ぎないと下りてきません。

「おはよう、僕、なんだかおなかが空いて」

二、三日前から桜井もよく眠れず、本を読んでいると言っていました。それで夜食に麦茶とバナナやあんパンも一緒に持つていきました。私は慌ててコーヒーを入れ、トーストを二枚に砂糖がけのトマト、ベーコンエッグを並べました。

まさかこの朝食が、桜井に作る最後の朝食になるとは夢想さえしませんでした。

誠さんと歌織を職場に送り出し、夏休み中のかれんに朝食を食べさせながら掃除に

洗濯にと走り回りました。その間、桜井はかれんの相手をしながら、食卓で新聞を読んではいました。特別に何も予定のない、平凡な本場に平凡な、一日の朝の光景でした。「おとうさん、今日は講座の仕事をしたいから、かれんを九時に山口さんにあずけに行きますから」

私が桜井に話しかけるのを聞きながら、かれんが口をふくらませていました。

「かれんちゃんはお家でじじと遊んでいたいな」

「じじも暑さでくたびれているから、山口さんのおばちゃんのでピアノを弾いてきてね。お昼には美味しいおうどん作ってくださいな」

山口京子さんは私より二歳年少で、ご主人を亡くされて哀しみから立ち上がるうと、ファミリー・サポートをしていました。

九時になり、

「じじ、いってきませす」

かれんの着替えを持ち家を出ました。手を振るかれんに、桜井はガラス戸越しに笑顔で手を振り返していました。

かれんをあずけ、郵便局に寄って帰宅すると、桜井は自室に上がりベッドを椅子代

わりに本を読んでいたました。

私は仕事を始め、気がつけば昼食の時間になっていました。

「おとうさん、お昼かれんが残したカレーライスに足している」「いいよ。かれんの残りで十分だよ」

毎日三食の献立こんだてを考えるだけで、私は血圧が上がってしまいます。桜井もそのあたりは承知しやうちしていて、献立に嫌な顔はしませんでした。その償つぐないに、桜井の好物は意識的に食卓しょくたくにのせました。とくに夏が盛りの枝豆が好物なので、毎日農家のスタンドで買い求めています。冷奴ひややつこも豆腐屋とうふやに出向き、つねに小鉢こぼちで出しました。カレーライスにハヤシライスも好物です。トマトとキュウリのサラダにコーヒート、桜井は美味しそうに食べていました。

午後二時にかれんを迎えにいき、そのとき私は何気なく山口さんに、

「ご主人のお葬儀そうぎは斎場さいじょうでなさったのね」

と、聞きました。いつかはくるかもしれない日のための心づもりの質問でした。

「主人は現役だったので、型通りの葬儀だったの」

山口さんは嫌な顔もしないで応えてくれました。七月に児童文学の親しい作家が亡

くなったとき、親族だけの葬儀だったので、

「私たちも葬儀は親族だけでいいわよね。だって本当に悲しいのは身内だけですものね」

そう桜井と話したばかりでした。桜井も、

「ご住職しゆしやくにきていただく必要もないと思うよ。鎌倉かまくらからここまでは遠いしね」と、他人事のように応えました。私はこれも現実的な話とは思わずに、軽い気持ちで受け流していました。

かれんを引き取り、鯛焼きたいてんの店で桜井のおやつに、粒あんつぶあんの鯛焼きを五個求めました。

「さあ、帰ろうね。じじが待っているから」

帰宅したのは午後二時半でした。

かれんが鯛焼きを一つ載せた皿を持ち、私がコーヒートのカップを手に桜井の部屋に入って思わず息を飲みました。

桜井は二カ所の窓の厚手のカーテンまでも引き、薄暗く凍る冷たさのなかでベッドにただ座っていました。部屋はまるで水底しみずに沈んでいるような異様さでした。

「おとうさん、こんな中にいたら座敷おじいさんになっちゃうわよ」

私は言いながらレースのカーテンだけにしました。

「鯛焼きとコーヒートをテーブルの上に置いとくわね」

ラジオから高校野球の中継の音が聞こえています。昼食時に、

「今日は沖繩の高校の試合があるんだ。勝ち進みそうなんだよ」

そう言っていたのを思い出しました。『ハテルマ シキナ』の縁で桜井にも私にも沖繩は第二の故郷でした。沖繩の苦しみはわが身の苦しみ、喜びはわが身の喜びでした。

テーブルに置いた鯛焼きとコーヒーを見て、

「かれんちゃん、ありがとう。ありがとうね」

と、かれんと私にいつものはにかんだ笑顔をむけました。

それが桜井の最後の言葉と笑顔になりました。

「今晩は唐揚げなの。これからかれんと揚げるのでなにかあったら言ってみてね」

言いおいて、私とかれんはキッチンに下り、タレに漬けて入れてあった鶏肉を揚げ出したのが午後三時でした。

「かれん、つまみ食いね」

桜井のように、かれんはなにかを感じていたのか、ずっと黙り込んでいました。

大皿一杯の唐揚げができて、火を止めた直後でした。

ダイニングの上にある桜井の部屋で、なにか堅い物を落とした音がしました。

「あつ、じじが何か落としちゃったんだ。かれんが拾ってあげてくるね」

天井を見上げたかれんが、キッチンを出て階段を登っていきました。

その直後です。

「ばば、ばばああ、じじが、じじがあ」

かれんが泣きながら、階段を駆け下りてきました。

私は階段をかけた上がり、桜井の部屋に飛び込みました。

「おとうさん、おとうさん、起きて、起きてえ」

桜井は南側の窓の下に頭を凭せかけ、正座をして黙っていました。

微かな唸り声が聞こえています。両肩を引き寄せれば起こせそうでした。キッチンで倒れたときよりずっと起こしやすい体勢です。私は両手で桜井の両肩を掴むようにして、力を込めて引き寄せました。でも、どう頑張ってみても桜井の身体を引きよせるこ

とはできませんでした。

桜井が、

——信子、もういいんだよ。これでいいんだよ。
そう言っているようでした。

「おとうさん、おとうさん……」

踞ったままの桜井の肩に左手を置きながら、ベッドサイドにある受話器で救急車を要請し、歌織と誠くんが電話をしました。

かれんの泣きじゃくる声と、ロッキーの吠え声が階下で渦巻いて聞こえます。

山口さんにも連絡してから、桜井に覆い被さりました。もう、うめき声はしていませんでした。それが永眠とは思えない静かな桜井でした。

サイレンが聞こえて玄関に駆け下りると、かれんがしがみついてきました。救急隊員に、

「二階の右奥の部屋に夫がいます」

と伝え、ひたすらかれんを抱きしめました。

二階で呼ぶ声が聞こえて、かれんをソファアに座らせると桜井の所へ行きました。

桜井は仰向けに寝かされ心臓マッサージが施されていました。

「手をつくしてはいますが、既に亡くなっていますので。こうなると杏林大学病院での死亡確認となります」

桜井が担架に乗せられ、運び出されようとしたときでした。

「かれんちゃんを家によこして」

と、隣の夏保ちゃんママが、異変に気付いて声をかけてくれました。

救急車に乗ると、横たわる桜井の右手を握ってみました。まだ温かく柔らかかったです。でも、握り返してはくれませんでした。

「おとうさん、おとうさん……」

何回も呼んでみました。でも、

——大丈夫だよ。

いつもの言葉も、はにかんだ笑顔も今度は返ってはきませんでした。

杏林大学病院に着くと、小さな部屋に案内されました。

長い時間一人でいました。

桜井との永別など実感できなく、涙もなく天井ばかり見ていました。

午後四時三十分、桜井が横たわる部屋に呼ばれました。

「死亡を確認していただきたいのですが」

医師がまっすぐに伸びた心音の映像を示し、瞳孔の開きを見せてくれました。私はどちらも見ているようで、見ていませんでした。

七十八歳と十カ月の生涯でした。

共に歩いた歳月は、三十八年と三カ月。いつも、いつも側にいるのが当たり前でした。お互いの遠出の仕事にも同行することが多々ありました。二人でいればどんな議論も成立し、互いを他人と思ったことはありませんでした。

8

「死因がはっきりしないのです。もしお知りになりたければ解剖をしますが」

私は、首を振りました。起き上がろうとしなかった桜井の思いを大切にしたいのと、身体に傷をつけたくなかったのです。私は桜井の傍らに立ち、

「おとうさん、今度は死んじゃったのね。たくさん、たくさんありがとう」

と、耳元で囁きました。不思議と心は冷静でした。いつもの寝顔のままです。その身

体が間もなく消えてしまうという実感などありませんでした。

連絡先を考えながら、桜井と一緒に霊安室に移りました。かれんは、大好きなじじの永眠にまでも遭遇してしまったのだとの思いが突き上げ、かれんの気持ちが案じられてなりませんでした。

持って出た新しい住所録で、各方面に桜井の永眠を知らせ終えました。そこへ誠くと歌織とかれんが霊安室に入ってきました。

三人は桜井に直面しても、やはり涙はありませんでした。

「信じられないですよ。また復活すると思ってましたから」と、誠くんが呟きました。

「そう願ったけれど、今回はおとうさんは復活する意志を自分から捨てたみたいなの」
そう応えました。そして、歌織にしがみついているかれんを引き寄せて、強く抱きしめました。

病院に入っていた葬儀社と話し合い、葬儀はせずに直葬とし、茶毘に付す日は二十日金曜日の午前中と決まりました。

桜井は自宅に戻らずに、二十日まで霊安室にいてもらおうと思いました。

かれんをこれ以上悲しませないように、そして、暑さの厳しさからの配慮はいりよでした。とりあえず、一旦いったん全員で帰宅し、警察の死亡現場検証に立ち会わなければなりません。二人の警察官が、覆面かめんパトカーで同行しての帰宅です。

警察官に説明をしながら、桜井が鯛焼たいきも食べきり、コーヒーも飲み干しているのに気づきました。そして、ラジオがついたままなのにも気づきました。桜井は沖繩おきなわの興南高校※が勝利しているのを、聞きながら永眠えいみんしたのです。

病院で呼吸を楽にする薬が処方されていたことから、死因は喘息ぜんそくの発作となりました。あくまでも推測の死因でした。

鎌倉かまくらの菩提寺ぼだいじの住職にも連絡をとり、戒名かいみょうも読経よみぎょうも桜井本人が希望していなかった旨むねを伝えました。住職は、

「わかりました。納骨なつこつの際ときに丁寧ていねいに拝をみましよう」

と、快く受け止めてくれました。

日本文藝家協会が発信してくれた死亡通知が、翌日の夕刊から主要各紙けいさいに掲載けいさいされました。

十九日は朝からみんなで桜井の元へ行きました。

私の母と姉夫婦と弟も別れをしました。家族でただ一人になってしまった桜井の次兄の義次さんは、茶毘ちびに付す明日の別れになりました。

じじへ

本当にありがとう

じじのおかげでたくさん思い出ができました。

こんどじじとあえるのははるかとおいけどじじのことはわすれないよ

じじのこと心から大好きです。

じぶんがじじのこと助けられなかったことがなによりかなしくざんねんです。

本当に、本当にありがとう

ここからかんしゃします

バイバイ

かれんより

かれんが桜井の棺ひつぎに入れるために書いた手紙です。かれんは「読まないでね」と私

※ 興南高校：沖縄県那覇市にある中高一貫教育の進学校。野球部は甲子園の常連校としてプロ野球選手も数多く輩出しており、2010年には沖縄県勢にとって夏の甲子園初優勝となり、史上6校目となる春夏連覇を果たした。

に託しましたが、物書きの性から私は大急ぎで書き写しました。

二十日の空は青く晴れ上がり、早朝から大変な暑さでした。棺に何を入れたらいいのか、何も思いつきませんでした。歌織は桜井の好物のケーキを用意しました。

桜井も私もともに親しかったロシア文学者の松谷さやかさんが、家族でかけつけてくれました。

納棺された桜井を花が埋めていきます。窆れることもなく、いつもの面差しのままです。胸に組まれた桜井の右手に、かれんの手紙を忍び込ませようとして、一瞬心臓が止まりました。桜井の堅く冷たい右手が動いたのです。そして、かれんの手紙をしっかりと握ったのです。周りのときも空気の流れも止まり、私は桜井の顔を見つめました。我に返り、かれんの手紙を握る右手と重なる左手を、両手で包み込みました。

娘の歌織と変わらずに、慈しんだ私たちのたった一人の孫のかれんです。かれんは桜井と干支も星座も同じです。桜井はつねに、

「かれんには、命こそ宝を再び学ばせてもらえだね」

そう言っていました。そのかれんに、三度も倒れる姿を見せてしまい永眠までも立ち会わせてしまったのです。どんなにか、かれんの心がかかりだったのでしょうか。

私は棺から離れると、右手が動いたことを歌織にそっと伝えました。

火葬場には義次さんと姪と甥、それにわたしの弟と甥も待つていてくれました。

再び桜井を花で覆い、棺が閉じられる時間になりました。私は初めて哀しみが込み上げ、桜井に頬擦りし抱きしめたくになりました。でも、そうはしませんでした。かれんがいます。私がつり乱せばかれんが苦しみます。

棺が火の中に入れられました。右手が動いたことが、もしやの思いを駆り立てます。同時に二人で生きた歳月が、胸から溢れて、ずっと耐えていた涙が堰を切ったように止まりません。もう、どんなに会いたくても、再び姿を見ることはできないのです。

——おとうさん、おとうさん、おとうさん……。

何回心のなかで言いつづけたでしょう。

父や義母、師、多くの先輩作家たち、友との別れでは味わったことのない哀しみは、吐き気がするほど胸を締めつけました。

「うそでしょっつ、おとうさん、うそだよね」

桜井の永眠後二十日が過ぎた九月八日でした。

私はとんでもないことを発見しました。役所や銀行関係の書類をそろえているときでした。私の手元にある桜井の市民カードと、新規の銀行の通帳の暗唱番号を確認していました。桜井が好きだと言った八一八〇を唱えていて、突然永眠した八月十八日と暗証番号が音を立てて重なったのです。

亡くなる日にとった桜井の行動が、鮮明に頭を廻りました。

朝早くキッチンにきたこと、かれんの残したカレーを喜んで食べたこと、厚手のカーテンをも閉めていたこと、かれんに二度ありがとうと繰り返した言ったこと……。

私は、あの日のままの桜井の部屋にかけ上がりました。

机には梨木香歩の『水辺にて』と、モースの『日本その日その日』がありました。そして、机前の桜井がときに手にする蔵書を収めてある書棚の、まさに一番目に届く場所にナンシー・ウツドの『今日は死ぬのもってこいの日』がありました。

ほかに八一八〇に関するメモでもと探すうちに、桜井の青春時代の友人・吉村道男さんの香典に添えられた手紙の文面を思い出しました。手紙を改めて読んでみました。

……桜井君は院友会の会報に、別れの覚悟の文章を書いていますよ……。

吉村さんと桜井は國學院大学の六十一期生でした。会報は毎号私も読みましたが、

吉村さんの手紙にある桜井の文章は、読んだ記憶がありませんでした。

どこかには探しなはずと探しながら、再び驚きの声が出そうになりました。

机上の右隅に、三十センチにも積み上げられていた競馬新聞の『勝馬』がなくなっているのに気づいたので。桜井の趣味は、野球やマラソンのテレビ観戦と競馬でした。馬券を買うことはほとんどなく、赤ペンで予想をし、データを作るための『勝馬』でした。それがきれいになくなっていました。会報はどんなに探しても見つからず、編集担当の友人杉浦俊治さんに電話して送ってもらいました。

その会報には『人生いろいろあって』の題で冒頭に友への感謝を、三度の突発事故の報告と『なげいたコオロギ』の一部引用が綴られ、

……こんなふうには老年を楽しんでいる様をお伝えしました。いずれにせよ、限られた人生の時間の扉は、間もなく閉じられます。ごきげんよう。

会報の発行日は九月一日で、原稿は初夏に集められているのがわかりました。私は会報を手を、しばらく立ち上げられませんでした。

※ 梨木香歩：1959（昭和34）年生まれ。作家。小説に『西の魔女が死んだ』、『冬虫夏草』『雪と珊瑚と』、『ピスタチオ』、『海うそ』など。エッセイに『ぐるりのこと』、『水辺にて』など。翻訳に『ある小さなスズメの記録』などがある。

※ エドワード・シルヴェスター・モース（Edward Sylvester Morse / 1838～1925年）：米国の動物学者。標本採集に來日し東京大学教授を歴任、大森貝塚を発掘した。日本にダーウィンの進化論を紹介した。

※ 『今日は死ぬのもってこいの日』（ナンシー・ウツド著／金関寿夫訳／フランク・ハウエル画）／1995年／めるくまー刊：インディアン的人生哲学を編纂した詩画集。古老たちが語るシンプルで深い生き方を収録した全米ロングセラーの翻訳本。

何事にも強靱な意志を持って、成し遂げてきた桜井です。永眠に関しても八一八〇をいつのころからか、心の中に秘めたのではと思わざるを得なくなりました。

この日以降、なんとか時間を作り、桜井の部屋に座り込みました。三台の本棚から次々と書類を出して調べ初めました。ベッド下にある七個ものダンボール箱を探ると、予想が的中したときと思える『勝馬』の分厚いファイルが見つかりました。そのときはあきれながらファイルをきちんと見もしませんでした。

税務署への申告に手間取り、なかなか桜井の部屋に座る時間ができないまま月日が流れました。

心は不思議なものです。桜井に二度と逢えないと思うと、哀しみを陵駕する恐怖心が湧いてきます。桜井が存命だった何事も無い日々に戻りたくてたまりませんでした。逢いたい、ただ逢いたいと、狂いそうになる心を鎮めるためにフランクルの『夜と霧』を繰り返し読みました。フランクルが妻を想う行に救いを求めたのです。桜井が一九九六年から五年間書き留めた日記も何度も読みました。反対に毎日CDで聞いていた音楽が、どの曲も聞けなくなりました。すべての曲が桜井との生活を想起してしまうからでした。

桜井のいない初めての新年を迎え、厳冬が過ぎるころでした。少し心が落ち着いてきて、冬は暖かい桜井の部屋に再び座るようになりました。そして、何気なく繰っていたあの『勝馬』のファイルを手にとり、最後のページで息が止まりました。そこに、狛江市からの喜寿祝いの祝儀袋ともう一つ、見開きのフォトファイルが挿んでありました。フォトファイルには、私の結婚直前と結婚直後の写真が、祝儀袋には新券の祝い金七千円と別に二万五千円が入っていました。

「おとうさん、おとうさん、見つけたよ。なんでこんなことをしたの。いつこうしたの。もし、知らずに捨ててしまったらどうするの。今、今、話したい。このことも八一八〇のことも」

私は『勝馬』のファイルを抱きしめ、咽び泣きました。

9

大好きなミモザの花が咲き、南から桜の開花が聞こえてきた三月十一日、狛江の地も波打ちながら揺れました。

この日もまた忘れられない日になりました。

※『夜と霧』(よるときり) ヴィクトール・フランクル著：1946年に出版された精神科医の強制収容所経験に基づいた作品。絶望下にあっても、生きる意味は自ら発見するものであり、苦しみは真実への案内役と説いた。

桜井は、安政地震じしん※で自分の稲田いなだに火を放ち、紀州・和歌山藩廣村村わかやまはんひろむら民の生命を津波から救った濱口悟陵はまぐちごりやうの生涯しょうがいを『燃えよ稲村の火』(PH P 研究所)の題でこども向けに書いていました。もし、桜井が存命していたら、津波を甘く見た大人たちに憤り、命を落としたこどもたちを思い悔しがったはずです。

刻々と伝わる被災地の惨状さんじやうは、阪神淡路大震災はんしんあわじだいしんさいとは相違する感情を私に教示してくれました。哀しみが直接的に心に入り込んできたのです。それは桜井を亡くしたことが、私の心境を大きく変えたからでした。桜井の友人の青沼喜美子さんが、

「夫を亡くして私は人生観じんせいかんが変わりました。結婚でもなく、出産でもなく、愛する夫との永別えいべつこそが人を変えるのかもしれないね」

甲斐ちやうもんの折りに言われた言葉が、初めて理解できました。

八一八〇を追いかけてはいられない現実のなか、ときの移ろいは矢の如く、桜井の一周忌を迎えました。永別した日が時間ごとに蘇り胸に迫りました。かれんと二人だけの夕食時に、

「じじに逢いたい」

と、抱き合って度々泣きました。桜井が遠く、遠くへ行ってしまうような、それでい

て側に居るような、不思議な感情が交差しながら時間は流れていきました。

〳〵気分転換てんかんに福山ふくやまにきませんか

児童文学作家の皿海達哉さんの二〇一二年の賀状に誘われて、百花繚乱りやうらんの四月を待ち私は福山への旅に出ました。桜井がいない初めての私的な旅でした。皿海さんの運転でしまなみ海道をドライブしながら、瀬戸内海を望むサーブスエリアで休憩をとりました。瀬戸の海は春陽に美しく輝き、

「ああ、桜井ときたかったな」

と、思わず呟つぶやき、つづけて、

「桜井はまるで意志を持って計画したように永眠したの。八一八〇という数字が好きで、八月十八日に召されたの」

桜井の永眠にまつわる私の思いを皿海さんに話しました。

「それって僕も偶然とは思えないな。桜井さんの人柄でいくと、その日をあえて選んだのではないかな。カーテンをすべて閉め切って暗いなかでしたの。覚悟の永眠だったと思うな。『西遊記』を書き上げ、お孫さんのおもちゃの家を作り、思い残

※ 安政地震：江戸時代後期の嘉永～安政年間(1854～1860年)に日本各地で連発した大地震。1855年の江戸地震、前年に発生した東海地震および南海地震など。ここでは安政元(1854)年11月4、5日(旧暦/新暦：12月23、24日)に発生した南海地震のこと。

すことなく潔く逝ったんだよ。でもそんなことは普通の人にはできないよ。すごい、ただすごい」

皿海さんはきっぱりと、桜井が八一八〇を選んだと言いきりました。

二泊三日の旅から帰京すると、再び桜井の部屋に座り込み八一八〇を追い始めました。

ゴールデンウィークが終わり、静けさがわが家に戻りました。麦秋を感じ始めた五月二十三日水曜日でした。南側にある書架の一番下段を探っていると、もう使わなくなった八ミリ映写機が入っていました。今まで探もしなかった場所です。

「おとうさんも、ここは狛江に越してきたときのままよね」

独りごとを言いながら覗いて、大きな茶封筒が映写機の上にあるのを見つけました。

封筒の中身は、B5用紙三百枚ほどにワープロで打たれた『日めくり詩集』と銘うった詩集でした。二〇〇五年六月二十八日から、二〇〇六年六月二十七日まで、毎日一、二編が綴られています。私は桜井の息づかいを感じながら読みつけ、求めていた八一八〇の答えを『日めくり詩集』のなかに見い出そうとしたのです。

日めくり詩集

桜井信夫

二〇〇五年六月二十八日より

二〇〇六年六月二十七日まで